

Newsletter



日本化学会
生体機能関連化学部会

巻頭言

分野を越えて忌憚なく議論する 清中 茂樹 2

ぶらり研究室の旅

関西学院大学 理学部 化学科 生命有機化学研究室
色々遊べる分子をつくる 佐藤 浩平 4

お知らせ

第18回バイオ関連化学シンポジウム
-第39回生体機能関連化学シンポジウム・第27回バイオテクノロジー部会シンポジウム- 6

第11回バイオ関連化学シンポジウム若手フォーラム 7

生体機能関連化学部会若手の会 第35回サマースクール 8

生体機能関連化学部会第3回国際シンポジウム 開催報告
(The 3rd International Symposium on Biofunctional Chemistry (ISBC2024)) 9-13

2024年度 生体機能関連化学部会役員 14

2024年度 生体機能関連化学部若手の会支部幹事 15

巻頭言

分野を超えて忌憚なく議論する

名古屋大学 大学院工学研究科
清中 茂樹

1998年9月、著者が初めて生体機能関連化学シンポジウム（以下、生体関連シンポ）に参加した年である。場所は松山。当時、九州大学でM1だった著者は、直接的に研究を指導いただいていた浜地格先生（当時 助教授、現 京都大学教授）の承認をなんとか得て、道後温泉に行くのを楽しみにしながらシンポジウムに参加した。著者はポスター発表であったが、口頭発表を行った当時の所属研究室の竹内正之先生（当時 助手、現 NIMS センター長）がとても緊張していたのを今でも覚えている。何も知らない当時の著者は、「助手の先生でも口頭発表時に緊張するんだ」と感じたが、いま考えると当然である。当時の生体関連シンポでは、口頭発表は1会場で行われ、そこに、国武豊喜先生、杉浦幸雄先生、新海征治先生、斎藤烈先生、小宮山真先生、長野哲雄先生、など本部会の設立に強く関わった先生やこの分野のレジェンドが、真剣な形相で講演会場の前方に陣取っている。当時は、相田卓三先生、藤田誠先生など、超分子化学の世界的な牽引者も参加していた。もちろん、現在、本部会で中核的な役割を担う先生方も、若手・中堅研究者として、とてもアクティブ（野心的!?)であった。そのような先生方が、個々の発表に対して、分野を超えた個々の専門性の立場から、サイエンスとしての重要性、ケミストリーとしての本質を追求した質疑をしていたからである。飛び交う質問内容はかなり厳しい表現であったことを覚えている。

著者が学生時代だった当時から比較すると、時代の変化に伴い、生体機能関連化学部会の研究対象分野は大きく様変わりしている。研究対象も、合成もしくは自然界から得られる生体分子を対象にした研究から、細胞内での生体分子のふるまいの化学的理解、細胞機能の制御、細胞システムの人工構築など、多岐に渡る。それに伴い、ケミカルバイオロジー、合成生物学など新たな学問分野や関連する学会・研究会が立ち上がった。学会に関しては、多すぎると感じるくらいである。また、生体関連シンポも、バイオテクノロジー部会との合同でのバイオ関連化学シンポジウムとなり、著者が学生だった頃に比べて規模が大きくなった。発表者の増加も伴い、現在は3会場で同時に口頭発表が進む。発表数が増加したことは研究分野の発展と強く関連するため、研究分野的に本当に素晴らしい。一方、著者にとっては若干の寂しさもある。タンパク質、核酸、分子認識など、分野が分かれて3会場で同時進行で進むため、異なる分野の先生からのコメントが得られにくく、また分野外の研究発表を聞く機会が減ってしまったことである。

1998年から26年後の2024年4月、本部会の国際シンポとして位置付けられる第3回 ISBC2024が名古屋大学で開催された。18人の外国人招待演者が来日し、3日間にわたりポスター発表も含めて活発に研究が議論された。永次先生・浅沼先生を中心とした開催に至った関係者の皆様に、心から感謝を申し上げたい。その詳細は、ISBC2024の報告書を拝見いただければと思うが、著者がここで特筆したいのは、本会が1会場で開催されたことである。分野の異なる6つのセッションに対して、参加者および演者がすべて参加できた。分野外の発表も含めてすべて聞けることは、やはり素晴らしいと感じた。外国人演者がすべて同じホテルに滞在したということもあり、研究分野が異なる外国人の招待演者同士も交流を深めていたように感じる。著者が学生時代と大きく違うのは、学会中もe-mailで仕事が降ってくることであり、これはほんと何かしたいものだが・・・。

25年以上経過すると、学術分野の国際状況も大きく変わった。著者が学生の頃からは考えられない、中国や関連諸国の飛躍的な研究環境の向上および研究力の躍進。対照的に、我が国では学術論文も含めた国際競争力の低下が多く取り上げられる。著者が学生の頃から、アメリカに対してパワーゲームをしたって勝てないと言われていたが、その様相はさらに強まっている。そのような社会状況で、我が国が世界において存在感を示すには、独自性を出す必要がある。生体機能関連化学部会は、現在活発化しているケミカルバイオロジー、合成生物学など複数の研究分野における我が国の源流の1つと言える。その場を利用して、1つの研究内容に対して、異なる分野の先生方が喧々諤々と真剣に議論することで、普段とは違った見解（独自性）あるいは発展性があるのではないだろうか？25年前に比べて、部会における研究の多様性ははるかに増えた。年に1回、1か所に集まって忌憚なく議論することは面白いと感じるし、新たな発想につながるだろう。それを酒の肴にして夜の親睦が深められれば、理想的である。

著者は、幅広い化学の知識の重要性から人脈形成に至るまで、生体関連シンポなどの活動を中心とした本部会で育ててもらったと断言できる。25年前とは状況が違うが、今このニュースレターを読んでいる若い学生が、将来、この部会で育ててもらったと思えるような形になればと切に願う。

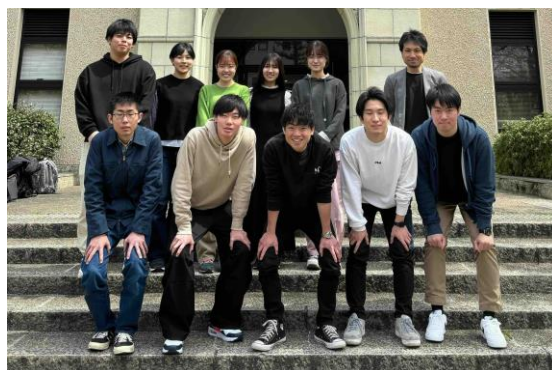
ぶらり研究室の旅

関西学院大学 理学部 化学科 生命有機化学研究室

色々遊べる分子をつくる

関西学院大学理学部化学科の佐藤浩平と申します。この度はこのような機会を頂きましたことを、九州大学の三浦佳子先生をはじめとする編集委員の先生方に心より感謝申し上げます。2023年4月に研究室を立ち上げたばかりではありますが、私自身と研究グループについて紹介させていただきます。私は現在に至るまで、様々な分野の研究に携わって参りました。千葉大学に在籍していた4年次には生物活性を有する天然物の単離と構造決定を行っておりましたが、大学院から東京大学の相田卓三先生の研究室に移り、環状ペプチドの合成とそれを基盤とした液晶化学・超分子化学に関する研究など (*J. Am. Chem. Soc.* **2011**, *133*, 13767.; *Chem. Sci.* **2014**, *5*, 136.; *Science* **2022**, *376*, 738.) を行い、学位を取得しました。その後、2014年から Samuel I. Stupp 先生 (Northwestern University) の研究室に博士研究員として勤務したことをきっかけに、両親媒性ペプチドの自己集合や細胞膜との相互作用に関する研究 (*J. Am. Chem. Soc.* **2017**, *139*, 8995. など) をはじめ、神経組織の再生医療 (*Cell Stem Cell* **2023**, *30*, 219. など) にも携わるようになりました。2018年に金原数先生 (東京工業大学) の研究室に助教として勤務してからは、細胞膜中で自己集合することで膜間イオン透過を行う分子の開発 (*J. Am. Chem. Soc.* **2021**, *143*, 1348.; *J. Am. Chem. Soc.* **2022**, *144*, 11802. など) に携わるとともに、2021年11月から2022年3月の5ヶ月間は Bradley L. Pentelute 先生 (Massachusetts Institute of Technology) の研究室に visiting assistant professor として滞在し、フロー合成によるタンパク質の化学合成に関する研究 (*J. Am. Chem. Soc.* **2023**, *145*, 12992.) を行いました。

こうした経緯を経て「生命有機化学研究室」を2023年4月に立ち上げました。着任と同時に有機合成用の装置類を整備し、1ヶ月ほどで実験ができる最低限の環境がなんとか整いました。その後の半年間は行き当たりばったりで日々を凌いでいましたが、2023年の12月に思い切って実験室の大改装を実施しました。初年度は学生さんたちには苦勞をかけっぱなしでしたが、彼らの奮闘のおかげで、今ではどなたにお見せしても恥ずかしくない立派な研究環境が整いました。研究室は現在2年目を迎え、学生数は修士5名、学部生5名の計10名の体制となり、だいぶ賑やかになってきました。最近では学生さんたちにも徐々に主体性が芽生えはじめており、日々頼もしく成長してくれているのが嬉しい限りです。ところで話題は変わりますが、闇実験という言葉があります。決して危ない意味ではなく、先生公認の研究テーマとは別に自分で面白そうな研究を思いついたからコソコソ実験してしま



グループの集合写真(2024年4月)

おう！というものです。この記事を読まれている方々にも少なからず経験があるのではないのでしょうか？私の場合、「こんなアイデアを思いつくなんで自分は天才だ！」と身震いするも、いざ実験してみると全く想定通りにいかない…。少し冷静になると、恥ずかしくなるくらい初歩的なミスをしていたことに気付いたり、やっと想定通りにいったと思ったら30年も前に同じことがやられていたことを後で知ったり…といった具合に、ほとんどの場合は絶望して終わるところまでがセットでした（私がこれまでに所属していたラボの先生方、試薬をたくさんムダ使いしてしまい申し訳ございません…。もう時効は過ぎていますよね…？）。実験する前にもっと勉強なさい！とお叱りを受けてしまいそうですが、私はこの「面白そうだと思ったことをすぐに実験できる」フットワークの軽さと自由度の高さがたまらなく好きで研究にのめり込み、今もなおアカデミアでの研究を続けています。現在の私の立場はPIとなり、さすがに学生や博士研究員だった頃と比べると自分自身で手を動かして実験する時間は減ってしまいましたが、その一方で私がかつて「闇実験」と呼んでいたものを、学生さんたちの力を借りて堂々と「正式な研究テーマ」として遂行できるようになりました。これこそが、研究室を主宰する醍醐味であるように思います。そんなわけで、今進行している研究テーマはドラッグデリバリーやバイオイメージング用分子、抗生剤の開発といったものから、分子機械の開発や新規合成反応の開拓、ひいては新しい構造解析法の開発など実に様々です。いずれも、私自身が得意とするペプチドのケミストリーや含フッ素化合物の機能化に関する知見を活かしつつ、新しい方向へと展開するべく試行錯誤をしている段階ですが、いつか独立して自分のラボを持った時に挑戦してみたいと考えていたアイデアを思う存分チャレンジできることに日々大きな喜びを感じています。その際に私が特に意識しているのは「良い意味で期待を裏切ってくれそうな分子をいかにして戦略的に設計するか」という点です。当然、研究をスタートする際にはある明確な目的に沿う形で分子を設計するわけですが、残念ながら設計した分子が当初の狙い通りに働いてくれないケースは決して珍しくありません。そこで、仮に最初の狙いが外れても、何か別の面白そうなことが起きるのではないかと期待を抱かせる分子を設計すること、すなわち「分子構造にいかにして遊びの要素を加えるか」が腕の見せ所であると考えています。なお、一緒に研究をしてくれている学生さんたちにもどうしたら研究を楽しんでもらえるだろうかと日々考えていますが、結局のところ私自身が誰よりも研究を楽しみ、その姿を見せること以上に私が出来ることは無いように思います。私は未だにTLCの反応追跡で原料が消えるだけでもハイテンションになるような単純な人間なので、（学生さんたちからすると邪魔かもしれませんが）これからも可能な限り現場で実験し続けたいと考えています。今年度はついに1期生の学生さんたちが学会発表デビューする予定です。まだまだ粗さが目立つ内容かもしれませんが、ぜひともお立ち寄りいただきご指導ご鞭撻を賜りたく存じますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



実験室の改装工事の様子
(2023年12月)

連絡先: 関西学院大学理学部化学科

e-mail: ksato@kwansei.ac.jp

住所: 〒669-1330 兵庫県三田市学園上ヶ原1番 電話番号: 079-565-7667

ホームページアドレス: ksatolab.net

お知らせ

第 18 回バイオ関連化学シンポジウム

—第 39 回生体機能関連化学シンポジウム・第 27 回バイオテクノロジー部会シンポジウム—

- 主催** 日本化学会生体機能関連化学部会、日本化学会バイオテクノロジー部会
共催 日本化学会、日本薬学会、日本生物物理学会、日本生物工学会、日本ケミカルバイオロジー学会、日本分子イメージング学会
後援 日本薬学会、日本ケミカルバイオロジー学会、光化学協会
会期 2024 (令和 6) 年 9 月 12 日 (木) ~14 日 (土)
会場 つくば国際会議場 (茨城県つくば市) (<https://www.epochal.or.jp/>)
発表申込期間・予稿原稿投稿期間 6 月 3 日 (月) ~6 月 21 日 (金)
参加登録申込期間 6 月 3 日 (月) ~7 月 19 日 (金)
- 討論主題** ペプチド・タンパク質・酵素・核酸・糖鎖・脂質・分子認識・超分子・生体モデル系・遺伝子・DDS 等が関連する幅広いバイオ関連化学
発表形式 口頭発表・ポスター発表
申込分類 (1) 分子認識・超分子・モデル系、(2) ペプチド、(3) タンパク質・酵素、(4) 核酸関連、(5) 糖・脂質、(6) メディカルバイオ、(7) 環境バイオ、(8) 分析・計測・センサー・デバイス、(9) DDS
ポスター発表 原則 1 日目および 2 日目
口頭発表 全日で 15 分間発表、5 分間質疑応答
*口頭発表は原則として 1 研究室 1 件まで。ただし申込みは 2 件までは可。
招待講演 柳沢正史教授 (筑波大学)、宮脇敦史チームリーダー (理化学研究所)
特別講演 菅裕明教授 (東京大学)
- 発表申込方法** 下記のシンポジウム・ホームページから
<https://pub.conf.it.atlas.jp/ja/event/biosympo2024>
参加登録費 [事前登録] 部会員：一般 9,000 円、学生 4,000 円、非部会員：一般 11,000 円、学生 5,000 円 [当日] 部会員：一般 11,000 円、学生 6,000 円、非部会員：一般 13,000 円、学生 7,000 円
懇親会 9 月 13 日 (金) 開催 (日時、場所、会費などはシンポジウムのホームページでお知らせいたします)
- 実行委員長** 中村史 (産業技術総合研究所)
副実行委員長 花岡健次郎 (慶應義塾大学)
事前参加登録申込方法 上記のシンポジウムのホームページでお申し込みください。
問合先 〒305-8565 茨城県つくば市東 1-1-1 中央事務所 5 群産業技術総合研究所 細胞分子工学研究部門 AIST-INDIA 機能性資源連携研究室内
E-mail: M-bio2024-ml@aist.go.jp

お知らせ

第 11 回バイオ関連化学シンポジウム若手フォーラム

<https://sites.google.com/view/bio2024wakateforum/>

日程：2024年9月11日(水)13:00~18:05

会場：つくば国際会議場

主催：日本化学会バイオテクノロジー部会若手の会、日本化学会生体機能関連化学部会若手の会

共催：日本化学会、日本化学会バイオテクノロジー部会、日本化学会生体機能関連化学部会

後援：サントリー生命科学財団

参加登録費：一般2,000円、学生1,000円(予定)

参加登録：7月1日(月)~8月16日(金) (変更の可能性あり)

招待講演 (敬称略、五十音順) :

河村 奈緒子 (岐阜大)、高村 彩里 (JST-CRDS)、寺坂 尚紘 (東工大)、野本 貴大 (東大)、
細川 正人 (早大)

世話人 (順不同) :

吉村英哲 (代表、東大)、松長遼 (東大)、金森功吏 (東工大)、細川正人 (早大)、馬悦 (東京医科歯科大)、吉本将悟 (名大)

お知らせ

生体機能関連化学部会若手の会 第35回 サマースクール
<https://sites.google.com/view/seitaiwakate35thsummer>

日程 2024年7月8日(月)～9日(火)

会場 JMS アステールプラザ

(〒730-0812 広島県広島市中区加古町4-17)

主催 日本化学会生体機能関連化学部会若手の会

共催 日本化学会生体機能関連化学部会、日本化学会中国四国支部、高分子学会中国四国支部

協賛 日本化学会、ホストーゲスト、超分子化学研究会

後援 テルモ生命科学振興財団、加藤記念バイオサイエンス財団、中国電力技術財団

参加費 一般:8,000円、学生:5,000円 (宿泊費・食費込み)

招待講演 (敬称略、五十音順) 秋吉一成 (京都大学)、櫻井和朗 (北九州市立大学)、高田十志和 (広島大学)、三浦佳子 (九州大学)、味八木茂 (広島大学)、森本展行 (島根大学)

世話人 河崎陸 (広島大学・代表)、平尾岳大 (広島大学)、高橋治子 (広島大学)、Lee Ji Ha (広島大学)、稲葉央 (鳥取大学)

生体機能関連化学部会第3回国際シンポジウム 開催報告
(The 3rd International Symposium on Biofunctional Chemistry (ISBC2024))

現地実行委員長

名古屋大学大学院工学研究科 浅沼浩之

生体機能関連化学部会は5年毎に部会主催の国際会議 International Symposium on Biofunctional Chemistry (ISBC)を開催しております。前回は2017年に京都大学で開催されたので本来なら2022年に開催するはずでしたが、コロナ禍で対面開催が困難だったため2024年に延期し、4月24日(水)から4月26日(金)の3日間、名古屋大学豊田講堂で無事開催することができました。まずはシンポジウムの開催にご尽力いただきました実行委員およびプログラム委員の先生方と、シンポジウムにご参加いただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。

ISBC開催を提案したのは浅沼が部会長だった2022年の9月の役員会でした。開催時期は退任後の2024年以降になることが予想されたので、次期部会長就任予定の永次先生と副部会長の松浦先生に名古屋大学で開催予定ということで事前に了承を得ていたのですが、名古屋大学の生体関連部会の先生方には全く根回しせずに名古屋大学開催を提案してしまったため、“ハイ”か“yes”の二択とは言ったけれどさあ・・・)役員会後に何名かの先生に詰め寄られてしまいました(申し訳ありませんでした!)

提案時に若干の唐突感はありましたが、2022年の10月から実行委員長の永次部会長が全体を取り仕切られて準備が始まりました。口頭発表は前回のシンポジウムを踏襲して6つのセッションを設けました。まずは永次部会長にセッション毎にリーダー2名を御指名頂き、リーダーが中心となって各セッションのプログラム委員が5名ずつ、下記6セッションで計30名の招待講演者を選出していただきました。2023年の8月頃までには全ての招待講演者からご承諾いただき、口頭発表のプログラム編成は順調に進捗しました。

Session 1: Synthetic Biology (Session leader/chair; Hirohide Saito, Youhei Yokobayashi)

Beatrix Suess (TU Darmstadt), Shunsuke Tagami (RIKEN), Bryan Dickinson (Univ. of Chicago), Ai Niitsu (RIKEN), Miho Yanagisawa (Univ. of Tokyo),

Session 2: New Approaches to Drug Discovery (Akio Ojida, Shinsuke Sando)

Tom N. Grossmann (Amsterdam Institute), Yu Rao (Tsinghua Univ.), Yoshiyuki Manabe (Osaka Univ.), Hiroshi Abe (Nagoya Univ.), Brian M. Paegel (Univ. of California)

Session 3: Beyond Naturally-Occurring Biomolecular Self-Assembly (Yoshiko Miura, Akinori Kuzuya)

Daisuke Takahashi (Keio Univ.), Stefan Howorka (Uni. College London), Kohei Sato (Kwansei Gakuin Univ.), Guosong Chen (Fudan Univ.)

Session 4: Organic Chemistry in cells (Junko Ohkanda, Shinya Tsukiji)

Luca Salassa (DIPC), Kenzo Yamatsugu (Chiba Univ.), Peng Zou (Peking Univ.), Jeremy M. Baskin (Cornell Univ.), Itaru Hamachi (Kyoto Univ.)

Session 5: Chemical probes for cell analysis and imaging (Shin Mizukami, Kenjiro Hanaoka)

Luke Lavis (Janelia Research Campus), Amandeep Kaur (Monash Univ.), Toru Komatsu (Univ. of Tokyo), Masayasu Taki (Nagoya Univ.), Stefan Matile (Univ. of Geneva)

Session 6: Designer Proteins and Enzymes (Takafumi Ueno, Osami Shoji)

Zac Ball (Rice Univ.), Franziska Thomas (Univ. Heidelberg), Terasaka Naohiro (TITEC), Ivan V. Korendovych (Syracuse Univ.), Nobuyasu Koga (Osaka Univ.)

一方のポスター発表については、多くの方に積極的に応募して頂くため、今回はポスター賞を設けることにしました。ポスター賞のガイドラインは若手の会代表の三木先生が中心となって若手の会の中で議論して頂き、1) 学生およびポスドクを対象とする、2) バイオ関連シンポジウムでの過去のポスター賞受賞者も応募可能、3) 受賞者数は9月のシンポジウムと同様にポスター賞応募者の10%を目安とする としました。さらに日本化学会から「BCSJ Award」および「Chemistry Letters Young Researcher Award」の提供を受け、受賞者のうちの上位二名に授与することにしました。ポスター発表への応募者は、対面のシンポジウムへの申し込みがコロナ前よりも減少するだろうと予想し、2023年11月1日から翌年3月1日までの5カ月の長期間、途中リマインダーも送りながら受け付けました。当初は賞応募者40件程度を含む110件ぐらいの申し込みを予想していましたが、大変嬉しい誤算で、応募総数が171件、そのうちポスター賞応募者が69件と、当初の控え目な予想を遥かに上回る応募がありました！そのためポスター会場として予定していた会議室（シンポジオンホール）だけではスペースが足りず、会議室前の空間（アトリウム）全てをポスター会場にして準備するほどでした。参加登録者も200人を越えれば十分と思っていたのですが、招待講演者も含めて292名もの方が参加してくださいました。



ISBC2024 参加者の全体写真

シンポジウム初日の4月26日は永次部会長の opening remarks から始まり、招待講演者らの素晴らしい講演と質疑が続きました。プログラムの都合上各セッション休憩なしの3時間連続講演でしたが、時間の経過を感じさせない熱気のある議論が行われました。夕方のポスターセッションでは、学生やポスドクにも英語で講演する機会を設けるため、最初に賞応募者全員に60秒以内で poster brief を行って頂きました。その後300人近い方々が一斉にポスター会場に移り、ビールと軽食を楽しみながらポスターの前で熱い議論が繰り広げられました。ポスター賞審査では、海外の招待講演者にも優れた発表に投票して頂くなど盛り上げて頂きました。

懇親会は27日の夕方に招待講演者らが宿泊しているメルパルク名古屋で開催され、永次部会長が“Chat GPT 挨拶”で大いに笑いを取られてから和やかに始まりました。今回は代表的な名古屋メシも是非堪能して頂こうと、“ひつまぶし”と“きしめん”の屋台も出して、海外のお客様にも名古屋をアピールさせていただきました。懇親会の中盤では、ポスター賞の授賞式が行われ、厳正な審査の結果、以下の7名の方々が受賞されました。誠にありがとうございます。

BCSJ Award

P-11: Tomoki Miyazaki (Grad. School of Eng., NITech),

Chemistry Letters Young Researcher Award

P-130: Ryosuke Kaneko (Grad. School of Eng., Kyushu Univ.)

Outstanding Poster Presentation Award in ISBC2024

P-41: Yuuhei Yamano (IMRAM, Tohoku Univ.)

P-48: Keita Tsutsui (Grad. School of Eng., NITech)

P-95: Koki Kunitake (Grad. School of Med., The Univ. of Tokyo)

P-107: Hongyu Zhu (Grad. School of Eng., Nagoya Univ.)

P-154: Kyohei Soga (Grad. School of Eng., Nagoya Univ.)



なお審査の集計を担当された村山先生によると、招待講演者の1票で受賞圏内に滑り込むなど、本当に僅差で受賞が決まったとのことでした。受賞者にもご挨拶して頂きましたが、国際学会の懇親会なので当然英語でお願いいたしました。事前に受賞を知らせていなかったこともあり、準備無しのぶっつけ本番の英語でのスピーチでしたが、“Please hire me”と言ってしっかり笑いを取る強者もいました。

多くの方々が最終日最後のセッションまで参加され、シンポジウムを大いに盛り上げてくださいました。久々の対面での国際シンポジウムでしたが、on-lineとは全く異なり、魂に響くライブの迫力満点のシンポジウムだったと確信しています。重ね重ね、シンポジウムの開催にご協力いただきました先生方と、ISBC2024にご参加いただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。次回第4回国際シンポジウムも大いに盛り上がることを祈念しております。

Organizing committee

Chair:

Fumi Nagatsugi (Tohoku Univ.)

Hiroyuki Asanuma (Nagoya Univ.)

Members:

Kazunori Matsuura (Tottori Univ.)

Takafumi Ueno (Tokyo Tech)

Shin Aoki (Tokyo Univ. of Science)

Kuniharu Ijro (Hokkaido Univ.)

Toshihiro Ihara (Kumamoto Univ.)

Kenjiro Hanaoka (Keio Univ.)

Akio Ojida (Kyushu Univ.)

Takashi Ohtsuki (Okayama Univ.)

Takeaki Ozawa (The Univ. of Tokyo)

Shinsuke Sando (The Univ. of Tokyo)

Osami Shoji (Nagoya Univ.)

Masahiro Takagi (JAIST)

Shinya Tsukiji (NITech)

Keiji Numata (Kyoto Univ.)

Yutaka Hitomi (Doshisha Univ.)

Shun Hirota (NAIST)

Hiroshi Fujii (Nara Women's Univ.)

Yukari Fujimoto (Keio Univ.)

Manabu Horikawa (SUNBOR)

Misaki Homma (Takeda)

Yoshiko Miura (Kyushu Univ.)

Hiroshi Murakami (Nagoya Univ.)

Shin Mizukami (Tohoku Univ.)

Hiroyasu Yamaguchi (Osaka Univ.)

Daisuke Miyoshi (Konan Univ.)

Takayuki Miki (The Univ. of Tokyo)

Shinobu Itoh (Osaka Univ.)

Local executive committee (Nagoya Univ.)

Hiroyuki Asanuma

Shigeki Kiyonaka

Hiroshi Murakami

Osami Shoji

Yuichiro Aiba

Gosuke Hayashi

Hiromu Kashida

Shinya Ariyasu

Keiji Murayama

お知らせ

2024 年度 生体機能関連化学部会役員

【部会長】

永次 史 東北大多元研

【副部会長】

松浦 和則 鳥取大院工
上野 隆史 東工大院生命理工

【幹事】

青木 伸 東理大薬
居城 邦治 北大電子研
井原 敏博 熊本大院先端
王子田 彰夫 九州大院薬
大槻 高史 岡山大院ヘルスシステム
小澤 岳昌 東大院理
山東 信介 東大院工
荘司 長三 名大院理
高木 昌宏 北陸先端大マテリアル
築地 真也 名工大院工 ※NL 編集員
沼田 圭司 京大院工
花岡 健二郎 慶大院薬
人見 穰 同志社大理工
廣田 俊 奈良先端大先端科学
藤本 ゆかり 慶大理工
堀川 学 サントリー生命科学財団
三浦 佳子 九大院工 ※NL 編集員(主)
水上 進 東北大多元研
三好 大輔 甲南大フロンティア
村上 裕 名大院工
山口 浩靖 阪大院理 ※NL 編集員

【監査】

浅沼 浩之 名大院工
伊東 忍 阪大院工

お知らせ

2024 年度 生体機能関連化学部会若手の会支部幹事

【北海道・東北支部】

与那嶺 雄介	北大電子研
岡村 秀紀	東北大多元研

【関東支部】

松長 遼 (代表)	東大院工 ※若手の会代表幹事
馬 悦	東京医科歯科大薬
金森 功吏	東工大理

【東海支部】

村山 恵司	名大院工
藤野 公茂	名大院工

【関西支部】

秋葉 宏樹	京大院薬
多幾山 敬	塩野義製薬
加藤 俊介	阪大院工

【中国・四国支部】

稲葉 央	鳥取大院工
河崎 陸	広島大院先進理工

【九州支部】

足立 惇弥	九大院理
勝田 陽介	熊本大工

ニュースレター Vol. 39, No. 1 2024年6月28日発行
事務局：101-8307 東京都千代田区神田駿河台1-5, 日本化学会生体機能関連化学部会
The Chemical Society of Japan, 1-5 Kanda-Surugadai, Chiyodaku, Tokyo 101-8307, Japan
URL: <http://seitai.chemistry.or.jp>
E-mail: seitai@chemistry.or.jp

編集委員：三浦 佳子、山口 浩靖、築地 真也

